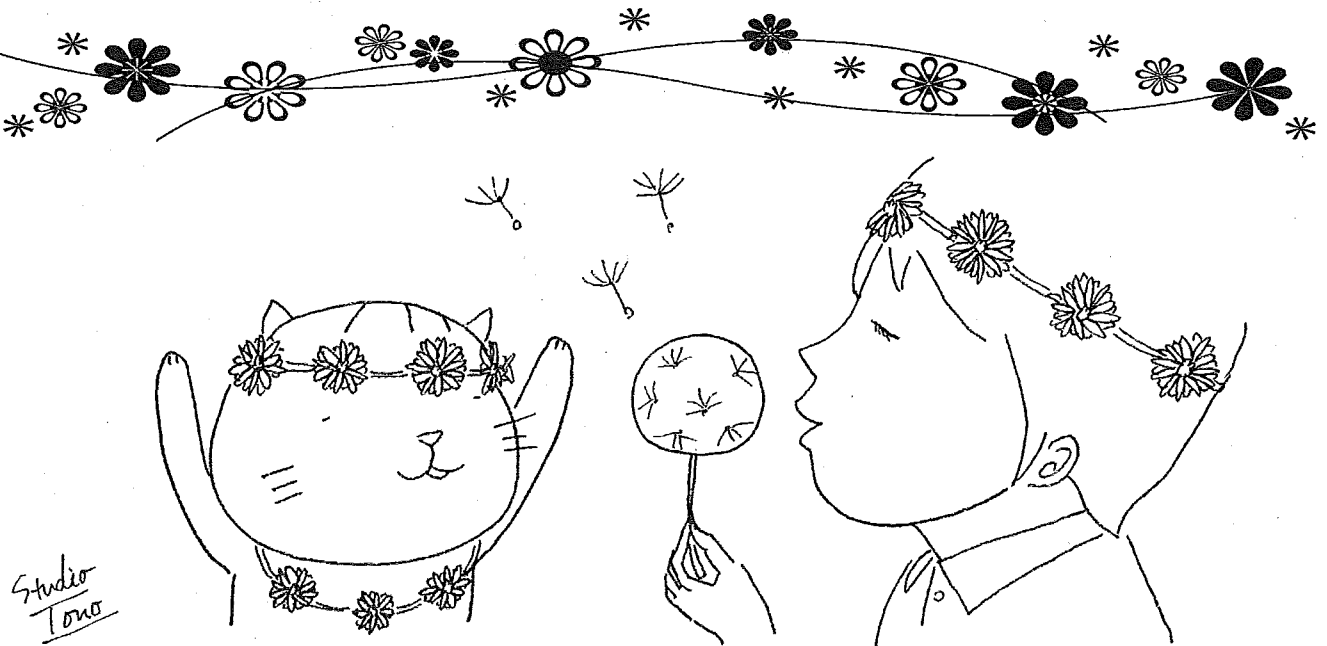


ボランティアグループがつくる和歌山県男女共同参画センターの書評誌

この本よんだ？

～りいぶる BOOK プラス～



小梅さんの日記

小梅さんの日記を楽しむ会 発行 2012年 (F:子育て)

この本は、江戸時代の終わり頃から明治中頃にかけて和歌山で暮らしていた川合小梅という女性が毎日つけた日記、小梅日記の中から記事を選び、どんなことが書いてあるのかなあ、とお伝えした絵本です。

彼女は、藩校(紀州藩士のための学校)の校長先生の家生まれ、和歌や絵の才能に恵まれ、八十六歳まで活躍しました。

現在見つかっている約五十年の日記には、小梅さんやその家族の事、家計やお付き合いの記録などのほか、藩校に届くお城からのお知らせも写されています。ラジオやテレビ、インターネットもないのに、遠くの大事件から

身近な噂話まで、なかなかの情報通です。小梅さんの残してくれたものから、当時の和歌山で生きた人々の日常を垣間見ることができます。



今年は、大河ドラマなどで注目されている郷土、和歌山。案外、知らないわが街の様々を絵とともに楽しんでみませんか？

(I.K)

きみはいい子

中脇初枝 著 ポプラ社 2012年 (K:エッセイ・文学)

作者の中脇初枝は高知県出身で、高校在学中に小説「魚のように」で坊ちゃん文学賞を受賞してデビューしている。

「きみはいい子」という題と美しい表紙にひかれ手にとった。だが想像していた内容とは大きく違って、何度も読むのをやめようかと思った。

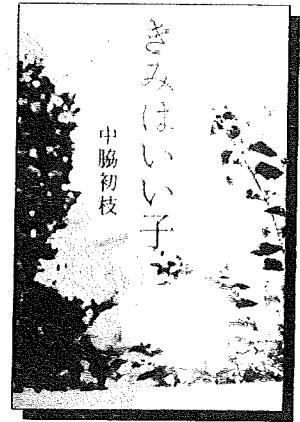
幼児虐待、家庭内暴力、DV。普段は新聞記事で読む全国の事件は数行の記事で伝えられるだけだが、この小説は「小説」だとわかっていてもあまりにもリアルな表現で、読むのが辛くて本を閉じたくなった。でも小編最後の何行かに救われ、また読み進む。

この小説は「サンタさんの来ない家」「べっぴんさん」「うそつき」「こんにちは、さようなら」「うばすて山」の6編から構成されている。

それぞれ登場人物や舞台がどこかで重なりあっているが、主人公が違う。つまり同じ事件でも違う視点から語られているのだが、3編目の「うそつき」は暖かい話である。優しい「うそ」の話に救われてまた読み進んだ。

結局最後まで読んだが、ずっしりと心に重くのしかかったものがあった。それは、あまりにも自分が平凡で幸せな家庭に育ったからだろうかと考えこまずにいられなかった。

(花賀)



アル中ワンダーランド

まんしゅうきつこ 著 扶桑社 2015年 (G:からだ)

本書は現在、漫画家・イラストレーターとして活躍中の著者のエッセイ漫画。普通の主婦であった著書が、インパクトのあるペンネームで開設した漫画ブログがニュースサイトに取り上げられ、多数の仕事が舞い込むようになる。多忙になった著者は次第に家事が滞るようになり、ブログのネタにも行き詰まる。最初は気分転換のつもりで飲酒を始めたが、事あるごとにアルコールに頼るようになっていき、次第に大量に飲酒するようになる。様々な失敗、大切な人たちに迷惑をかけ続けても飲酒をやめることができない、いわゆる地獄に落ちていく。病院に行くよう家族や仕事関係の人から言われ、医師からアルコール依存症だと病名を告げられる。葛藤しながらも、

処方された薬を服用しカウンセリングを受け、断酒会に出席して禁酒に成功する。

帯に峰なゆかさん(『アラサーちゃん』作者)が書かれているように「超おもしろい! 超われえない!」驚愕する出来事が多数描かれています。巻末には美人な著者の写真も載っています。

ぜひ、一度手に取って見てください。

(K)



マンガのなかの〈他者〉

伊藤公雄 編 臨川書店 2008年 (A:フェミニズム)

のらくろ、三つ目がとおる、サイボーグ009、有閑倶楽部、らんま1/2、アドルフに告ぐ…。取り上げられているマンガは時代もジャンルも幅広い。なじみのマンガもあるが、殆ど一般には読まれていないアマチュア作品も含まれている。

マンガは日本のポップカルチャーの代表的なものであり、世界に類を見ない程、発展を遂げている文化と言えるが、学術的な対象にされることはあまりない。本書は、マンガを〈他者〉というキーワードであらゆる角度から分析することにより、歴史的な観点から日本が外国からどのように見られ、また日本が外国をどのように見てきたか、というようなことを考えていく試みである。

執筆陣は国語学者や社会学者など6名。各人が1章ずつ担当し、それぞれの専門分野の

切り口から論じる論文集となっている。例えば第1章では国語学者の金水敏が、中国人を連想させる「〇〇〇アルヨ」などの「異人ことば」という視点で論じる。第3章では社会学者の山中千恵が有名な少年マンガ「ドラゴンボール」が韓国社会でどう読まれたかについて論じる。こちらは韓国人にとっての〈他者〉＝「日本マンガ」という視点、といった具合に。

マンガ好きである私は興味深く読ませてもらった。と同時に、執筆された先生方も相当にマニアックだなあと感心した。

(O.S)



貴様いつまで女子でいるつもりだ問題

ジェーン・スー 著 幻冬舎 2014年 (K:エッセイ・文学)

女性向けの雑誌はたくさんあって自分の好きなものを買えばいいのだけど、どれもこれも違う気がする。「女子は〇〇だ」と決め付けられると「私は違う」と言いたくなる。そんなふうを感じている女性には特にお勧めしたい本です。本書では、『いつまでも女子』な女性 vs 『女子』を馬鹿にする女性」というような構図は当てはまりません。どのような女性・考えに対しても、自分に対しても「まあこ



んなもんか」と認識するスタンスです。様々なテーマのコラムが掲載されていますが、全体を通して、いろいろな考えの持ち主を容認して、自分も生きやすくなるような考え方のヒントに触られます。

本書の著者であるジェーン・スーさんは東京生まれ東京育ちの日本人で、作詞家、ラジオパーソナリティー、コラムニスト、と多彩な活動をされています。微に入り細に渡る思考と自分の考えを正確に文章にできる能力をうらやましく感じます。「なるほどなあ」と感心させられる本なので、ぜひ読んでみてください。

(A.T.)

とどまることなく

アン・ロックウェル 作 グレゴリー・クリスティ 絵 国土社 2002年 (J:自伝・評伝)

この絵本は、約200年前ごろ奴隷解放に生涯をかけた黒人女性イザベラ(後の名をソジャーナ)の物語で、自伝をもとに書かれている。

ニューヨーク州の某競売で、たった9歳の身で買い取られたイザベラは、その後約20年間農場での過酷な奴隷生活を懸命に生きた。何回かの転売、16歳での強制結婚、産んだ子供たちもまた奴隷にされていくような悲惨な人生だった。

しかし30歳のころ、運よく奴隷制反対の夫妻に助けられて、イザベラは自由の身となり、聖書や法律を学ぶなかで奴隷解放への思いを強めていった。ある夜、イザベラは夢のお告げを聞く。「ニューヨークを出よ。アメリカ中を旅して、奴隷だったころのことを人々に語れ。ものいわぬ、すべての奴隷たちの声になれ」と。彼女は身一つで旅立つ。名前を「ソ

ジャーナ(先に進んでいく人)・トゥルース(真実)」と改め、固い決意を抱いて。

行く先々で彼女は語った。時に暴徒に襲われても、人々は話を聞き、考え、ほかの人々へ伝えた。ソジャーナの話は国中に広がり、やがてアメリカを奴隷制のない自由の国へと導く大きな力となったのだった。

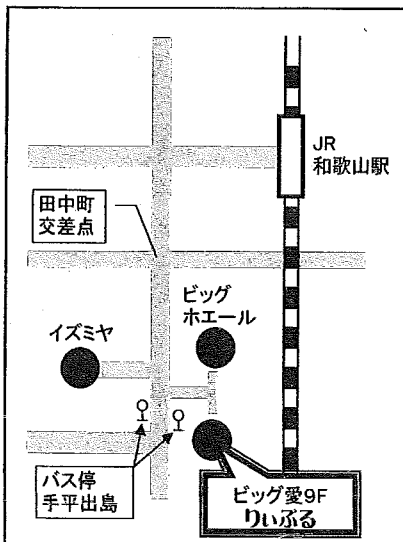
「絵」がまたすばらしい。デフォルメされた大胆な絵柄、強烈な色彩だが、文章を読んでからじっくりと絵を見ると、想像力がぐんぐん広がっていくようで驚いた。特に「目」がいい。その目の語る心のすべてを読み取らずにはいられない。

(大空)



※“りいぶる”での分類記号一覧

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:こころ・癒し F:子育て G:からだ
H:セクシュアリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他
P:AV 資料 Q:コミック R:NPO サポートセンター所蔵図書



この本 よんだ? 第11号 (2016年4月発行)

◇企画・発行 りいぶるぶらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

【編集後記】

新年を迎えた一月に、私たちは新年会を行ないました。いつもは電話でやりとりしている南部の方が和歌山市までこられて、梅の話をしてくれました。申年の梅は「難が去る(申)」→縁起がいいといわれ、いつもの年より売れ行きがいいそうです。「梅はその日の難逃れ」ということわざもあるようです。和歌山の梅を食べましょう。

E-mail libreplus@yahoo.co.jp

ボランティアスタッフ募集。メールでお問い合わせください。